

主 題：「教会の一致と私たちの喜び」

聖書箇所：ピリピ人への手紙2章1-5節

テーマ：神の家族がますます一致において成長していくために

新しい一年が始まって、こうして神様のことばを皆さんと続けて学べることを心から感謝しています。この朝一緒に考えたいのは、ピリピ人への手紙です。きょうは特にピリピ2：1-5を中心に見ていきますが、その前にまず少し考えてみてください。皆さんはもうそれぞれに新年の目標などを立てたかと思いますが、教会としてはどのように成長していきたいと願っているでしょうか？兄弟姉妹とともに、どんな神の家族になっていきたいと考えているでしょうか？もしまだ考えていないという方がいるなら一度考えてみてください。おそらくいろいろな思いや願いが出てくるでしょう。ますます兄弟姉妹とともに聖書のことばに立つ群れになっていきたいとか、互いを愛して少しでも励まし合ったり支え合ったりするような群れになっていきたいとか、福音を宣べ伝えるそんな群れになっていきたいとか。もちろんどれもすばらしい願いです。

でも新しい一年をスタートする今だからこそ、あのパウロが抱いていた一つの願いを改めて心に留めてみたいと思います。教会がこのようになってほしいということ、彼ははっきりとこのピリピ2章、特に2節にこう記していました。「私の喜びが満たされるように、あなたがたは一致を保ち、同じ愛の心を持ち、心を合わせ、志を一つにしてください。」と。パウロの願い、それは「神の家族が一致すること」でした。「兄弟姉妹が一つにいるということ、それが私にとっての大きな喜びだ。」と述べていたのです。思い返してみれば、これはイエス様も望まれていたことでした。ご自分が十字架にかかる前、最後の晩餐を弟子たちとともに過ごされたイエス様はこのように祈っておられたのです。ヨハネ17：20-21にこんなことばが記されています。「：20 わたしは、ただこの人々のためだけでなく、彼らのことばによってわたしを信じる人々のためにもお願いします。：21 それは、父よ、あなたがわたしにおられ、わたしがあなたにるように、彼らがみな一つとなるためです。また、彼らもわたしたちにおられるようになるためです。そのことによって、あなたがわたしを遣わされたことを、世が信じるためなのです。」こうしてパウロだけでなくイエス様も救われた者たちが一つであるということをお願いしておられました。

では皆さん、果たして今の私たち自身は、この「一致する」ということをどれほど重要なものとして捉えているのでしょうか？さっきどんな神の家族になっていきたいですか？と質問した時、どれぐらいの人が真っ先に、兄弟姉妹とますます一致する者として成長していきたい、と願っていたでしょう？一致することは不要です、私にはいりません、と考える人は皆さんの中にはおられないでしょう。でも具体的に、一致するということがいっぱい何を意味しているのか、またこれがどんなに大切なものなのかを、私たちは本当に理解しているのでしょうか？新しい年が始まった今、いま一度この大切な真理をみことばから一緒に考えてみたいと思います。特に教会に欠かすことのできない「一致」に関して、パウロは大きく三つのことを2：1-5の中で教えてくれていました。「一致のための動機」「一致のための特徴」そして「一致の方法」です。どうして私たちが一致を追い求めるべきなのか、追い求めるその一致とはそもそもどんなものなのか、そしてその一致をどのようにして追い求めていくのか。順番に考えてみましょう。その内容に入る前に、まずはいつものように聖書のことばをお読みしますのでピリピ2：1からそれぞれよくみことばに耳を傾けてみてください。

### ピリピ2：1-5

「：1 こういうわけですから、もしキリストにあって励ましがあ、愛の慰めがあり、御霊の交わりがあり、愛情とあわれみがあるなら、：2 私の喜びが満たされるように、あなたがたは一致を保ち、同じ愛の心を持

ち、心を合わせ、志を一つにしてください。:3 何事でも自己中心や虚栄からすることなく、へりくだって、互いに人を自分よりもすぐれた者と思いなさい。:4 自分のことだけではなく、他の人のことも顧みなさい。:5 あなたがたの間では、そのような心構えでいなさい。それはキリスト・イエスのうちにも見られるものです。」

## ○教会に欠かせない一致に関して：

### 1. 一致のための動機 1節

では早速「一致のための動機」から考えてみましょう。どうして私たちは一致を追い求めるべきなのか、その動機が1節に記されていました。「こういうわけですから、もしキリストにあって励ましがあ、愛の慰めがあり、御霊の交わりがあり、愛情とあわれみがあるなら、」と。まず皆さんに注目してほしいのは、「もし」ということばです。「もし」と耳にすれば、何か仮定の話であったり、可能性の話のパウロがここでしているかのように聞こえるかもしれません。「兄弟姉妹の皆さん、もしもね、仮に、あなたがたのうちにキリストにあっての励ましがあるのなら…」と。でも、果たして可能性の話をしようとしていたのでしょうか？もちろんそうではありません。ここでの「もし」ということばの使われ方ですが、これは「だから」とか「なぜなら」ということばで置き換えることのできるものでした。つまりここでのパウロのことばを言い換えるなら、「キリストにあって励ましがあるのだから、愛の慰めがあるのだから、御霊の交わりがあるのだから、愛情とあわれみがあるのだから」ということが言われていたのです。仮定や可能性の話ではありません。ましてやピリピの信仰者たちの何かをパウロが疑っていたのでもありません。彼らにとって揺るぐことのない確実な事実を宣べていたのです。「愛する皆さん、皆さんは確かにキリストにあって励ましがあるのだから、一致を求めて私の喜びを満たしてください。」と。こうしてパウロは改めて彼らの立っている基盤を、さらに言うならすべての信仰者に共通するキリストにある立場を思い出させていました。皆さん、これはとても大切なのでよく覚えておいてください。教会が一致を追い求めていくためには、まず何をするかではなく、なぜ一致を追い求めるべきか、その動機を思い出すことが大切だ、ということです。パウロはここでいきなり信仰者たちに向かって、「あなたたち、一致を求めるためにこれをやってください。あれをやってください。これをこなしてください。」などとは言いませんでした。彼らに愛をもって言ったのです。「皆さん、思い出してください。」と。そしてパウロが動機として思い出させていたものが、ここに大きく四つ挙げられていました。どんなことをパウロは思い出させていたのか、順に見てみましょう。

### ●思い出させた四つの動機：

#### 1) キリストにあっての励まし

まず一つ目に思い出させていた動機、一つ目は「キリストにあっての励まし」でした。2節はこう続いていたのです。「もしキリストにあって励ましがあ」と。ここで用いられている「励まし」ということばですが、これにはもともと「だれかのそばに寄る」といった意味が含まれています。想像してみてください。だれかのそばに寄るのです。何のためだと思えます？その人を慰めるためだったり、勇気づけるためでした。このことばには「慰め」とか「勇気づけること」といった意味が含まれているのです。しかもここで言われていた「励まし」というのは、単なる励ましではありませんでした。何か前についていましたね。ここでパウロは単に「励ましがあ」とは言わなかったのです。「キリストにあって」と。単なる励ましではなく、キリストにあっての励ましでした。要するにここで言う「励まし」というのは、キリストを個人的に知っている者が、キリストによって救われて、キリストによって今を生きている者が持っているその励ましや慰めのことを言っていたのです。ひとりの註解者もこんなことばを残していました。「私たちはキリストを知り、キリストの内に見出されるという祝福を受けています。また、私たちには信仰の賜物をも与えられています。キリストの内にいると知っていること以上に、私た

ちを元気づけるものがあるでしょうか？試練や苦しみの中にあっても、イエスとの関係の内に励ましを見出すことです。」どうですか？まさにその通りだと思いませんか？

改めて皆さんも思い出してみてください。かつて私たちはみな、ただその頑なな罪深さのゆえにさばかれて当然の罪人でした。例外はいませんでした。しかしそんな罪人のために救い主が十字架にかかって救いを成し遂げてくださいました。かつて私たちはみな、たださまよってそれぞれ自分勝手な道に向かっていただけの愚かな羊でした。しかしそんな羊のために、羊飼いがみずからいのちを捨ててくださいました。かつて私たちはみな、ただ生まれながらに神様に逆らい続け御怒りを受けるべき子らでした。しかしそんな子のために神の御子が身代わりとなって代価を支払ってくださり、そしてこの方にあつて罪赦された者はみな、感謝なことに今はもう神の子どもとされたのです。救われた者はみなそうでした。こんなすばらしい救いのみわざを自分自身のこととして知っているのなら、この事実がそれぞれのうちに励ましを生み出すと思いませんか？今私たちの身に何が起こったとしても、絶対に揺るがないキリストの中に私たちは居続けるのだというこの揺るがない事実は、私たちのうちにどんなときも変わることもない慰めを生み出すと思いませんか？救われた者たちはみな、そんなキリストにある励ましを、慰めを確かに持っているのです。私たちひとりひとは持っているのです。そしてそれを持っているのなら、パウロは言うのです。「その励ましが動機となって、私が喜び、何よりも主が喜んでくださるその一致を追い求めてください。そんなにすばらしい励ましや慰めを持っているなら、むしろそんなすばらしいものを与えてくださった主の喜ばれる一致を追い求めていきたいと思いませんか？」と。それが一つ目の動機でした。

## 2) 愛の慰め

次に二つ目の動機として思い出させていたのは「愛の慰め」でした。2節の続きを見ていくとこう書いていたのです。「**愛の慰めがあり**」と。ここで登場していた「慰め」ということばは、今見た「励まし」と非常によく似たものでした。もともと「だれかと親密に話す」とか「親しみを込めて隣で話しかける」といった意味が含まれています。何のために話しかけます？弱った者を隣で慰めてあげたりするわけです。文字通りこのことばは、そのように「弱った者を隣で慰めてあげる」ということを表したりもしました。「慰め」というのは、そのような身近な親しみのある「励まし」や「慰め」のことを表していたのです。

そしてここでパウロが言わんとしていたことは、救われた者はみなキリストにあつて励ましがあるだけでなく、父なる神様の愛のうちにも同じように慰めを見出すことができるということです。みことばは別の箇所でもこのように宣べていました。ローマ5：5-8「：5 この希望は失望に終わることがありません。なぜなら、私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです。：6 私たちがまだ弱かったとき、キリストは定められた時に、不敬虔な者のために死んでくださいました。：7 正しい人のためにも死ぬ人はほとんどありません。情け深い人のためには、進んで死ぬ人があるいはいるでしょう。：8 しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。」以前の私たちは不敬虔で、神様から遠く離れ滅ぼされるべき敵として歩いていました。みな例外なくそのように生きていたのです。神様の愛になど値するような存在では全くありませんでした。しかしそんな何の希望もない時に、神様が私たちにみずから愛を示してくださいました。またそれで終わりではなく、今もなお変わらずに愛を注ぎ続けてくださっているのです。たださばきを恐れ怯えるしかなかった私たち、そんな私たちが救われ、救われただけでなく、この神様によって慰められ、慰められるだけではなく、たとえ弱さや困難を覚えるそのときでさえこの方とともに歩み続けることができると。愛の慰めが救われた者のうちにはあると。救われた者はそんな愛の慰めを確かに持っている。私たちも同じです。そして私たちも持っているのなら、パウロは言うのです。

「その慰めが動機となって、私が喜び、何よりも主が喜んでくださるその一致を追い求めてください。そう歩みたいと思いませんか？」と。

### 3) 御霊の交わり

続けて三つ目の動機は「御霊の交わり」でした。続きに書いていました。「御霊の交わりがあり」と。この「交わり」ということばには「同じものを共有する」とか「分かち合う」といった意味が含まれる“コイノニア”という大切なギリシヤ語が使われていました。「同じものを共有する」という意味がこの「交わり」に含まれているのです。つまり救われた者はみな、ただキリストにあって励ましがあるだけではありません。愛の慰めがあるだけでもありません。同じ一つの御霊にある交わりを持っている、共有しているというわけです。これもいま一度考えてみてください。みことばがはっきりと言っているように、すべての信仰者は同じ御霊の力によって新しくされました。ここにいる私たちひとりひとりも救われ、新しくされたのであれば、同じ御霊によって変えられたのです。ひとりとして例外はいないのです。Iコリント12:13にこう書いていました。「なぜなら、私たちはみな、ユダヤ人もギリシヤ人も、奴隷も自由人も、一つのからだとなるように、一つの御霊によってバプテスマを受け、そしてすべての者が一つの御霊を飲む者とされたからです。」すべてのものがバラバラの御霊を飲むようにされたとは書いていませんでした。すべての者が一つの御霊を飲む者とされた、というわけです。そしてこの同じ一つの御霊によって生まれ変わった者たちのうちには加えて、今もなお同じ御霊が内住しているというのです。みことばはそのことも教えていました。同じ聖霊なる神様が私たちのうちに生きて働いておられると。皆さんの隣に座っておられる兄弟姉妹も皆さんと同じ聖霊によって救われ、同じ聖霊が内住しているのです。生きて働いているのです。どんなふう生きて働いているのか？この御霊が私たちに真理を教えてください。この御霊が私たちに罪を気づかせてくれて、この御霊が私たちに力を付けてくれて、この御霊が霊的に成長する助けを与えてくれて、この御霊が御霊の実を实らせてくださるのです。忘れてはいけません。皆さん、すべての信仰者は同じ一つの御霊を受けました。皆さんが否定しようが同じ一つの御霊を受けたのです。そうみことばは教えていました。そしてその御霊にある交わりをもうすでに私たちは共有している、というのです。では、もうすでに私たちが一つの御霊にあって一つとされているのなら、どのように歩いていくべきなのでしょう？同じ御霊によってすでに一つのものとして結ばれているのなら、私たちにどんな歩みがふさわしいのでしょうか？パウロはエペソ4:3-4でこう書いていました。「:3 平和のきずなで結ばれて御霊の一致を熱心に保ちなさい。」と。なぜなら「:4 からだは一つ、御霊は一つです。あなたがたが召されたとき、召しのもたらした望みが一つであったのと同じです。」と。それが三つ目でした。

### 4) 愛情とあわれみ

そして最後四つ目の動機は「愛情とあわれみ」でした。1節の最後のところにこう書いていました。「愛情とあわれみがあるなら」と。この二つのことばは非常によく似た意味を持っています。「愛情」はだれかに対する深い愛を、「あわれみ」はだれかに対する心からの心配や同情心を表しています。よく似た意味を持つ二つのことばが使われています。ただいづれにしるこの二つのことばを用いてパウロが言わんとしたことは明白でした。これまでも見てきたように、救われた者はみな例外なく神様からの深い愛情や値しないあわれみをもう受けてきました。ことばに表すことのできない恵みを、キリストや御霊を通して私たちはすでに味わったのです。そんな愛情を自分のこととして知ったのであれば、そんなあわれみを自分も持っているのだとすれば、パウロは何を言いたいかわかります。「それらが動機となって、互いに同じ愛情を示して、一致を追い求めていきたいとは思いませんか？」と。

皆さん気づきますか？一致を追い求めるというのは、すでに受けた大きな恵みに対する私たちの自然な応答でした。自分はあまりにもすばらしい恵みを、賜物を受けたのだと理解した者の、喜びにあふれた自然な応答だったのです。何度も言いますが、すべての信仰者は確かに三位一体の神様からあまりにも

すばらしいあわれみを受けました。本来なら何も値しないのに、私たちは神様の愛によって慰められ、キリストにあって励まされ、御霊にあって一つとされたのです。それが私たちのうちになされた働きでした。それが今も続く働きでした。そしてこんな揺るがない最高の事実を覚えた時に、私たち自身も、そんなすばらしい働きを成してくださったその主が喜んでくださる一致をもっと追い求めていきたいと望むようにならないでしょうか？

こうしてパウロは、なぜ一致を追い求めるべきなのか、その動機を思い出させていました。それが最初でした。もうこの揺るがない土台の上に、揺るがない基盤の上に皆さんは立っていますと。そしてその基盤の上に兄弟姉妹が一致するということを求めていたのです。そしてパウロはその動機を先に宣べた後で、次に彼は、彼らが実際に追い求めていくべき「一致」というものがどのようなものなのかについても2節で教えてくれていました。

## 2. 一致の特徴 2節

パウロは皆さんに対して、一致を求めていく動機づけをただけではなく、では実際に求めていく一致はこのようなものですよと、はっきりと記していたのです。その特徴を2節の中で三つ見て取ることができます。2節「私の喜びが満たされるように、あなたがたは一致を保ち、同じ愛の心を持ち、心を合わせ、志を一つにしてください。」と。最初にも言いましたが、パウロにとって大きな喜びをもたらすもの、それはピリピの教会が一致することでした。兄弟姉妹が一つとなること、一つであること、それが彼の喜びだったのです。ではいったいどんな一致が彼に喜びをもたらすものだったのでしょうか？

### a) 同じ考え

まず一つ目の特徴は「同じ考え」でした。パウロはピリピの信仰者たちのうちに同じ考えというものが見られるようになることを望んでいたのです。2節「私の喜びが満たされるように、あなたがたは一致を保ち、」と。この「一致を保ち」と訳されている部分ですが、これは字義通りに言えば「同じことを考える」というふうに訳すことができます。そして2017年版の聖書を持っている方は多分こっちの方が分かりやすいですが、そこには「同じ思いとなり」と訳されていました。「あなたがたは同じ思いとなり…」と。つまり教会の一致には、兄弟姉妹が同じ考えを、同じ思いを持つということが欠かせなかったのです。ただここで気をつけてほしいのは、「同じ考えを持つ」と言ったときに、これは「違いをすべて押し殺してみながすべてのことにおいて同じ意見を持たないといけない」という話をしているのではない、ということです。パウロはなにも信仰者全員がまるで感情のないクローン人間のようになれ、というふうに教えていたわけではありません。それぞれが独自の考えや意見を持つことを禁じているのではありません。むしろいろいろな違いを持った人たちが、同じ一つの神の家族に召されているというその事実こそ、福音が成し遂げた偉大なみわざでもありました。

では、いったい「同じ考えを持つ」とは、どういうことなのでしょう？鍵になるのはこの「考える」ということばです。「考える」と聞けば、私たちすぐに知的なことを思い浮かべるかもしれませんが、これは単に知的な面だけではなく、感情や意志を伴う心の態度、そういったものを表す面も含まれているということです。ひとりの註解者ピーター・オブライエンはこんな説明をしていました。この「考える」ということばに関してですが、「（考えるという言葉は）人の態度や心の傾向全体を表現することができます。…この動詞は単に知的な活動だけでなく、意志の動きをも表しているのです。」ですから知的に考えることだけの話をしていることばではありませんでした。もう少し広い意味を持っていたのです。そして実際に少し先の5節を見ると、同じことばがこんなふうに訳されています。「あなたがたの間では、そのような心構えでいなさい。」この「そのような心構えでいなさい」ということばに、同じことばが使われているのです。ですから一方では、「一致を保ち、考える」と訳すこともでき、他方ではこのように「心構えでいる」といった心の態度を表すこともできたのです。

そうすると皆さん、兄弟姉妹が同じ考えを持っているという姿を、思い浮かべることができますか？考えてみれば教会は確かにさまざまな点で異なる違いを持った人たちの集まりです。今周りを見渡せば、私たちはいろんな違いを持っています。それぞれが育ってきた背景も違えば、人種もことばも違いかもしれませんし、年齢や性別もバラバラだったりするのです。そのような違いを持った人たちが一つの神の家族として歩いていこうとするのです。当然そこには考え方や意見においても異なっている部分はあるでしょう。でもそういった違いがある中において、兄弟姉妹がともにみことばを学んで、そのみことばを通してキリストの真理を知って、そしてその知った知識をただ知っただけではなくて、その真理を喜んで実践したいという態度でいるわけです。ひとりだけがその態度でいるわけではありません。熱心な者だけがそのような心構えでいるわけではありません。皆さん、みながみことばから同じキリストを知って、みながそのキリストに倣う者として歩いていこうと、そう心に決めるのです。同じことを知っただけではなくて、同じように心を決めて、同じ考えを持つのです。すべての兄弟姉妹がこうして同じ考えを持つということ、それが一つ目の特徴でした。でもこれだけではありません。

## b) 同じ愛の心

続けて二つ目の特徴が書かれていました。「同じ愛の心を持ち、」と。二つ目の特徴は「同じ愛の心」でした。信仰者は同じことを知っているだけではない、同じように考えているだけではない、同じように心の態度を持っているだけではない。同じように同じ愛を持っているというのです。同じ愛が私たちの群れのうちに見て取ることができるというわけです。ここで登場しているこの「愛の心」ということばはもう言うまでもないかもしれませんが、これには「アガペー」の愛が用いられていました。アガペーの愛というと、これを言い換えれば、この愛というのは単に感情だけで終わるものではなくて、少なくとも相手のために自分自身をささげようとする犠牲的な愛を表していました。つまり兄弟姉妹、教会は、そのような愛でもってみずから互いに愛を示そうとするというわけです。そんな愛が私たちのうちに見られるようにと。でももちろんこれが容易でないことは私たちがよく知っています。私たちの間には違いがあるのです。考え方や好みもそれぞれにあるからこそ、時にその違いが原因となって、いざこざや争いが起こってしまうことさえあります。そしてそんな違いがある中で、もし私たちが互いの間で示そうとしているその愛が、それぞれの感情やそれぞれの気持ち、そのようなものに基づく愛であれば、私たちの愛は簡単にただ示したい人にだけ示すものになってしまうでしょう。愛を示しやすい人にだけそれを示して、示しにくい人にはそれを示さない。でもそのような愛をどう思います？群れが実践していたら、そこに一致は生まれると思います？そうではないですね。私たちの示す愛というのは、まず神様によって私たちが示された愛でした。キリストの十字架を通して明らかにされたそんな犠牲的な愛でした。かつての私たちはだれもこの愛を知りませんでした。キリストに出会って私たちは初めてその犠牲的な愛を知ったのです。そしてその愛を確かに知った今、私たちはその同じ愛を互いの間で実践しようとする、というわけです。値しない自分に一方的に注がれたその愛を知ったからこそ、値しないように思えるほかの兄弟姉妹に対しても喜んでそれを示そうとするのです。ヨハネもこのようにはっきりと書いていました。I ヨハネ 4:19-21 「:19 私たちは愛しています。神がまず私たちを愛してくださったからです。:20 神を愛すると言いながら兄弟を憎んでいるなら、その人は偽り者です。目に見える兄弟を愛していない者に、目に見えない神を愛することはできません。:21 神を愛する者は、兄弟をも愛すべきです。私たちはこの命令をキリストから受けています。」ここも同じでした。私たちがまず愛を示しましょう、そうしたら神は私たちを愛してくださいます、なんて書いていなかったのです。「私たちは愛しています。神がまず私たちを愛してくださったからです。」と書いていました。私たちが知らない愛で知らない愛を実践することなどできません。神が私たちにまずその愛を示してくださったから、その愛でもって私たちは互いを愛しようとするのです。こうしてすべての兄弟姉妹が同じ考えを持つだけでなく、同じ愛の心を持つということ、それは教会の一致において欠かすことのできないものでした。私たちの群れの

うちにそれが見られること、信仰者の群れのうちにそれが見られることをパウロは望んでいたのです。でもこれで終わりでもありませんでした。

### c) 同じ焦点

最後三つ目に描かれていた特徴は「同じ焦点」でした。フォーカスです。パウロは最後に言っていました。「心を合わせ、志を一つにしてください。」と。ここで「心を合わせる」というのは想像できるかもしれません。文字通り信仰者たちがうまく一つのものとして調和している様子を表しています。心を合わせているのです。そして「志を一つにする」というのは、「一つのことを考える」とか「一つの目的、目標に専念する」といった意味を表していました。一つのことを考えるのです。多くのことをいろいろ考えるのではなくて、一つの目的、一つの目標に専念するのです。つまりこの二つのことばを組み合わせて考えるなら、教会の一致には、あらゆる兄弟姉妹がまさに一つのものとして、同じ一つの焦点に熱心であるということが欠かせない、というわけです。

もう何度も言っていますが、私たちのうちには挙げればきりがないほどいろんな違いがあるのです。国籍や文化や性格や価値観や育ってきた環境など、さまざまな面において異なっています。でもそんな異なる私たちが同じキリストによって救われ、同じキリストによって救われた私たちが心を一つに合わせ、キリストと福音のために焦点を絞って生きていこうとするのです。何をしても主の喜ばれることをなし、すべてのことにおいて主の栄光を現そうとするのです。まさにこれこそ、すべての信仰者にとって目指すべき一つの目標、一つの焦点でした。そのようにして私たちは神様の栄光のために生きていこうとするわけです。

でも皆さん、同時にこれほど私たちが容易に過ちに陥ってしまうものもないかもしれません。主に喜ばれることをしたいと思って始めたことが、いつのまにか主のためではなくて、自分自身のためになってしまっているなどということもあります。最初は神様の栄光を現したいと願っていたその熱心な思いや願いも、次第に、私はこんなにも頑張っているのにどうしてあの人は…とか、あの人のやり方よりも自分の方がよくできるのにと、ほかの人と比べることを始めてしまったり、これは私のです、これは私の働きです、ほかの人は私のやり方に口出ししてほしくありませんと、そのような頑なさや高慢さを覚えることもあるかもしれません。私たちはみな、すぐに“自分”というものが出てきます。そしてそのような“自分”が出てくるとどうなるか？結果として喜びではなく不平不満が、感謝ではなく苦い思いがあふれたりするのです。だからこそ忘れてはいけませんでした。私たちのなすことはすべて自分の栄光ではなく、主の栄光を現すためになす、ということです。それが私たちの、すべての信仰者にとって何よりも熱心であるべき、ただ一つの同じ焦点だったのです。パウロはピリピの信仰者たちがそのような群れとして歩むことを願っていました。同じ考えを持って、同じ愛の心を持って、そして同じ焦点を持って彼らが一つのものとして歩んでいくことを。

さて、ちょっと立ち止まって考えてみてください。果たして私たちは今パウロが描いているようなこの「一致」を追い求めているのでしょうか？それぞれが、です。でも、それぞれだけではなく、私たちの群れ全体を見るときに、果たしてこんな三つの特徴を私たちのうちに見て取ることができるでしょうか？私たちは同じ考えを持って、みなと一緒にになってキリストを知って、キリストに倣う者として歩んでいきたいと、今そう願っているのでしょうか？私たちは同じ愛を持って、みなと一緒にになって、同じ愛を受けた者として互いの間で犠牲を払って愛を示していきたいと、そう願っているのでしょうか？私たちは同じ焦点を持って、みなと一緒にになって主の栄光を現したいと、そう願っているのでしょうか？これは皆さん、あなたの話です。周りのだれかがやっていたら自分には何の関係もない、という話では全くありません。思い出してください。このような一致を求めるのは、私たちがすでに大きな恵みを受けたことに対する感謝の応答でした。あなたがそれを受けたのなら、あなたが神様にあるその慰めを励ましを

知っていると言うのなら、それぞれの応答は、一致を追い求めていくということです。それが私たちの自然な応答でした。

でもさらに言うなら、このような一致は、パウロや主だけではなく、私たち自身にも大きな喜びをもたらすようになるのです。パウロは、自分の喜びだけが満たされればいいなどとは思っていませんでした。パウロは知っていたのです。そのようにして一致して歩む群れへと変わっていけば、その群れも喜びにあふれるようになります。でも、そう思いませんか？神の家族がともに集うとき、そこにいつも同じ考えがあるのです。私たちがひとりではみことばの真理を知るのに難しさを覚えることは多々あります。キリストに倣って歩んでいこうとするときに、いろんな戦いやチャレンジがあつて、励ましを必要とすることも多くあるのです。でも同じ考えを持つ者たちが集ったときに、主を愛しているその兄弟姉妹がともにいて、互いに励まし合うことができるというわけです。それだけではありません。神の家族がともに集うとき、そこにいつも同じ愛があるのです。たったひとりで信仰生活をしていくではありません。同じ神様の犠牲的な愛を知っている兄弟姉妹がその愛を互いに示し合つて、互いの必要を補い合いながら歩いていくことができるというわけです。

また同じ考えや愛があるだけではなく、神の家族がともに集うとき、そこにいつも同じ焦点があるのです。もちろん、今もなおそれぞれのうちにはいろんな違いが存在しています。でもそれ以上に、同じキリストにあつて一つとされた兄弟姉妹と一緒にあって、何をするにしてもキリストを宣べ伝え、主の栄光をともに現していくことができるというわけです。しかもこの一致は、もうすでに主によって成し遂げられたことでした。そうだとすれば、そのように主によって一致したその群れは、一致においてともに成長していきたいと。そして成長していけば成長していくほど、それはひとりひとりにとって大きな喜びとはならないでしょうか？ここである人はこんなふうに思っているかもしれません。すばらしいです、みことばが教えているようにこんな一致を自分も追い求めていきたいです。でも具体的にはどうすればいいんですか？どうしたらこんな一致を実際に成し遂げることができるのですか？と。感謝なことにはパウロはその答えとなる一致の方法、手段も最後3-4節で教えてくれました。

### 3. 一致の方法 3-4節

もう一度みことばをよく見てください。3節からこう書いていました。「:3 何事でも自己中心や虚栄からすることなく、へりくだって、互いに人を自分よりもすぐれた者と思いなさい。:4 自分のことだけではなく、他の人のことも顧みなさい。」と。皆さん、方法は、何と言われていました？私たちが互いに一致した者として成長していくために手段となるものは、何と言われていました？一言で言うならそれは「謙遜」でした。「私たちが互いにへりくだる」こと、それが一致の手段だ、というわけです。みことばはすごいと思いませんか？知恵にあふれていると思いませんか？一致を目指していくためにいろんなプログラムを考えなさい、などとは一つも言っていませんでした。「謙遜でありなさい」と。

この謙遜について今から詳しく見ていきたいと言いたかったのですが、残念ながら残りの時間ではすべてを考えている余裕がないので、三つ目の「一致の方法」に関しては、来週また皆さんと一緒に見てみたいと思います。方法を知りたいはずなので、ぜひ楽しみにしながら帰ってきてください。

でも最後に一つだけこの「謙遜」について先に言うなら、「謙遜」というのは、自分自身に言い聞かせて「へりくだらないといけない」ではなくて、何よりもまず、いつも私たちが神様の正しい姿を覚えて、そしてその神様の前に自分の立場を正しく覚えるときにこそ生まれてくるものだ、ということです。私たちはいつも忘れてはいけません。きょうの最初にも一緒に見ました。確かに私たちは今、キリストにある励ましを、愛の慰めを、御霊の交わりを、愛情とあわれみを受けました。でもどれをとっても私たち自身が勝ち取ったものではありません。与えられて当然なものなど一つとしてありません。さらに言うなら、聖く正しい神様の前に罪に罪を重ねていたそんな私たちに値したのは、ただ永遠の滅びでしかありませんでした。みずからの意志で逆らい続けていたような者が、その神様から永遠に引き離

され地獄で苦しみ続けるのは、当然の結果でしかなかったのです。私たちにすべての賜物が、恵みが与えられたのは、ただ三位一体の神様のその大きなあわれみのゆえ、その大きな愛のゆえでしかなかったということです。そして私たちがその大きなあわれみを覚えるなら、その神様の愛を正しく覚えるなら、その神様の前に自分自身を立たせ続けるなら、私たちが取ることのできる態度は、へりくだることしかないというわけです。

ですから来週、私たちは「へりくだる」ということを考えていきます。でもその時にいつも思い出し続けてください。私たちは確かに1節で見たように、一致を追い求める動機を持っています。キリストにあって励ましがあって、愛の慰めがあって、私たちはそんなすばらしい土台に立っているのです。でもそれらすべては私たちの力でなしたのではなく、神様が成されたのだということ覚え続けることです。そしてそれを覚えたときに、喜んでへりくだりたいと。そのようにして真理によって砕かれた者として歩み続けていくことです。自分自身の考えや思いを優先するのではなくて、同じ主を愛する兄弟姉妹の必要を担って、また何よりもすばらしい神様の栄光をたたえる者として、ともに生きていきましょう。ますます謙虚になって、同じ考え、同じ愛の心、同じ焦点を持って、そして教会の一致を追い求める者として、今週もともに歩み続けていきましょう。

そしてもし、まだこの中にこの主のすばらしい救いを知らない方がいるのなら、このすばらしい主を知らない方がいるのなら、どうか神様に逆らい続けるその生き方をやめて、そしてこの神様の前にあわれみを求めて立ち返ってください。みことばははっきりと教えてくれました。「罪から来る報酬は死です。」（ローマ6：23）と。必ず逆らい続けている罪人は、神様の前に立つ日がやってきます。そしてそこで正しいさばきを受けるのです。でも、まだ救いはあります。私たちのために来てくださった、愛する救い主イエス・キリストを自分の救い主として、主と信じて、この方を主として歩み続けてください。この方にある救いをきょう自分自身のものとしてください。この方にある喜びこそ、すべてにまさる喜びです。